

2022年度 傾斜的研究費（全学分）  
社会連携支援（都連携研究支援・A型・B型） 研究報告書

【研究費区分】：社会連携支援（B型・出版）

【研究代表者所属】：人文科学研究科 文化基礎論専攻 歴史学・考古学分野

【研究代表者氏名】：巽 昌子

【研究代表者氏名フリガナ】：タツミ マサコ

【研究代表者職】：助教

【研究分担者（所属,氏名,職）】

- ・お茶の水女子大学歴史資料館，奥田 環，研究協力員
- ・ロシア国立人文大学歴史史料研究所，鈴木 佑梨，共同研究生
- ・お茶の水女子大学，安田 次郎，名誉教授
- ・お茶の水女子大学基幹研究院人文科学系，大藪 海，准教授

【研究課題名】：コロナ禍で考えた「継承」 ～デジタル化？デジタルか？～

【研究実績の概要】

・本研究の目的は、日本中世史、ロシア近世史、博物館学の研究者が、各専門分野の問題意識に基づき、コロナ禍における文化の「継承」について学際的に探究することにある。その際、コロナ禍を機に急速に普及した「デジタル化」を共通テーマに据え、現代社会が直面する課題に対して歴史学や博物館学が果たし得る役割の一端を探った。巽が主宰する「継承」の比較史研究会が、2021年3月に開催したシンポジウムにおける研究報告と討論とを礎に、その後の研究会等で得られた研究成果も踏まえて学術書『コロナ禍で考えた「継承」 ―デジタル化？デジタルか？―』（巽 昌子編著、雄山閣、2023年3月）として刊行した。

具体的にはハンコ、図書館・文書館、博物館といった一般的に馴染み深いモノ・場所を題材として、歴史学と博物館学の観点から、文化の「継承」に対するデジタル化の「影響」・「現状」・「進展」を捉えた。加えて「継承」と「デジタル化」、最新の社会情勢であるウクライナ戦争に言及した補論・コラムも掲載した。それぞれ専門的な内容を扱いつつも、身近なモノや社会的関心の高い事象を扱うことにより、本書が大学の教育研究成果を広く社会で共有するための一助となることを目指した。

【研究成果の都民への還元あるいは東京都への政策提言】

- ・歴史学、博物館学の方向性・可能性を都民に広く知っていただくために、研究成果を書籍として刊行した。その執筆に際しては学術的内容の水準を維持しつつも、各学問を専門としない方々にも読みやすいものとなるよう努めた。それにより本研究費の趣旨である、大学の教育研究成果の都民への還元を行った。

**【東京都以外への社会への提言や活動の実績】**

- ・研究成果を書籍として刊行することにより、社会全般への幅広い「知」の共有を図った。
- ・今回の書籍刊行のきっかけとなった「継承」の比較史研究会の活動を継続し、今後も公開シンポジウムの開催などを通じて「知の社会貢献」活動に取り組む。

**【外部資金への応募状況】**

- ・2022年度の応募は行わなかったが、本研究成果を基に「継承」の比較史研究会の活動を盛んにし、今後科学研究費等外部資金への積極的な応募と獲得を目指していく。

**【科学研究費助成事業や国等の提案公募型研究費、企業からの受託研究費・共同研究費の獲得状況】**

- ・科学研究費（若手研究）を、研究代表者として獲得中（2020～2023年度）。

**【出版したことによる波及効果】**

- ・今回の書籍刊行により、主にふたつの波及効果が見込まれる。

ひとつめは、学術的効果である。今回刊行した書籍で扱った研究は、様々な専門分野の研究者の目に触れ、関心を抱いていただくことによって学際的研究としての一層の発展が見込まれるものである。本研究は研究代表者・研究分担者ともに若手研究者が中心となっているため、これまでは異なる専門分野の研究者との間に十分な研究ネットワークを形成することが困難であった。そこで今回の書籍刊行を通して研究活動の普及を促進し、今後の研究の発展に活かすことによって、そうした状況の打開を目指す。実際に本書の刊行を受けて、日ごろ学会等での接点が限定されている他分野の研究者からの反響が得られていることから、これを機会に研究ネットワークの構築・拡大につなげていきたい。

ふたつめは、教育研究成果の社会への還元である。今回刊行した書籍の執筆にあたっては、学術図書として専門的な内容を扱いながらも、専門用語に説明を付すなど、当該分野を専門としない方々にとっても読みやすいものとなるよう心掛けた。これらの工夫を通し、大学の教養課程や生涯教育といった面でも広くご活用いただけるものとすることによって、刊行書籍が教育研究成果の発信力の向上に寄与することが期待される。